

「オールコックの富士登山」展

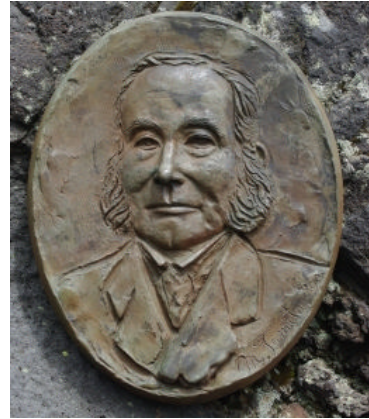
初代英国公使ラザフォード・オールコックによる外国人初の富士登山から150年

(1) オールコック初代駐日英国公使

ラザフォード・オールコック (Rutherford Alcock) (1809～1897年)は、1859年(安政6年)駐日英国総領事兼外交代表として来日し、途中一時帰国を挟み、1864年まで初代英国公使を務めた。

オールコックは、外科医から外交官に転身し、中国・日本といった東アジア外交で長く活躍した。駐日公使在任中は、日英関係の進展に務め、開港開市延期問題や遣欧使節団の派遣、四国連合艦隊下関砲撃事件などに関わった。彼の日本駐在経験は自著『大君の都』に詳しい。

駐在時の1860年(万延元年)には大宮・村山口より富士登山を行った。これは、記録上、外国人初の富士登山であった。また、駐在当時は外国人襲撃事件が頻発しており、1861年(文久元年)には、オールコック



オールコック登山記念碑(富士宮口五合目)

自身、英国公使館であった東禅寺(現東京都港区)を襲撃され、危うく難を逃れている。

オールコックは、駐在経験を活かし、日本語や日本文化の著作を著したほか、1862年のロンドン万博には日本で私的に収集した品々を出展している。晩年は、王室地理学会会長や病院理事、慈善団体役員などを歴任するなど多彩に活躍した。

(2) 外国人の富士登山

地域に残された資料によると、幕末期、外国人による富士登山が5回行われた。最初に登山したオールコック以降、登山道には大宮・村山口が使用された。彼らは、公使館や領事館のある江戸・横浜方面から東海道を通過して吉原宿に至り、大宮町を経て村山に向かった。また、当時の富士登山は同じ登山口から登山・下山することが一般的だったが、彼らの中には登山口と下山口を別にする者もいた。

【地域資料に見る幕末期の外国人登山】

年号	内容
万延元年(1860)	英国公使オールコックらイギリス人8人
慶応2年(1866)	スイス総領事ブレンワルト(Caspar Brennwald)らスイス人4人
	アメリカ公使ポートマン(Anton. L. C. Portman)ら8人
慶応3年(1867)	オランダ総領事ポルスブルック(D. de Graeff van Polsbroek)らオランダ人5人・中国人1人
	英国公使パークス(Harry S. Parkes)、パークス夫人ら10人

(3) オールコックの富士登山

万延元年7月(1860年9月)、オールコックは、富士登山をするため旅に出た。これは、記録上、外国人として初めての富士登山であった。オールコックは、大宮・村山口から富士山に登頂し、帰路熱海に滞在して温泉を楽しんだ。

旅には、オールコックを含む英国公使館職員らイギリス人8名に加え、通詞、外国奉行役人などが同行した。他にも、荷物を運ぶ人足・馬、案内・護衛などが加わり、オールコックの希望とは逆に大行列となってしまった。

この旅は、窮屈な江戸を離れ心身ともにリフレッシュすることが目的だったが、裏には、日英修好通商条約にある内地旅行権の確認や日本国内の世情視察を行いたいという政治的思惑もあった。また、富士山の科学的調査も計画され、英国インド海軍大尉ロビンソンによる測量や、園芸家ヴィーチによる植物調査が行われた。

(4) 富士山中

7月23日、吉原宿に宿泊したオールコック一行は、翌日大宮町を経て村山に入った。そして天候が回復した25日、村山を出発し、登山を開始した。

① 大宮町

江戸時代の大宮町は、浅間神社領地(社領)と幕府直轄地(御領)からなっていた。オールコック一行の休憩・宿泊場所は社領に用意され、オールコックらイギリス人は浅間神社別当家に休憩・宿泊した。また、御領は一行の荷物を運ぶ人足・馬を用意した。

【同行者】

イギリス人：公使オールコック、公使館職員
ユースデン、公使館職員マクドナルド、
公使館職員ガワー、英国インド海軍大尉
ロビンソン、ガワー氏、園芸家ヴィーチ、
英国陸軍士官フォンブランク

幕府随行者：外国奉行調役、外国奉行同心、
外国奉行定役、外国奉行調役並、小人目
付、通詞(川原又兵衛) など

(フォンブランク著『日本と華北の二年間』、
『袖日記』等から作成)

【旅行日程】

月日	日 程
7/19	神奈川の英国領事館出発～藤沢宿泊
/20	藤沢宿～小田原宿泊
/21	小田原宿～箱根宿泊
/22	箱根宿～三島宿泊
/23	三島宿～吉原宿泊(台風のため大宮町泊 予定変更)
/24	吉原宿～大宮町(休憩)～村山(大鏡坊)泊
/25	村山から登山開始～中宮八幡堂～六合目 山室泊
/26	六合目山室～頂上～一ノ木戸山室泊
/27	一ノ木戸～村山(昼食休憩)～大宮町泊
/28	大宮町～吉原宿～三島宿泊
/29	三島宿～韮山～熱海着
～	以後、熱海滞在
8/13	熱海を出発～小田原宿泊
/14	小田原宿～藤沢宿泊
/15	藤沢宿～神奈川の英国領事館帰着

(オールコック著『大君の都』より作成)

② 村山

オールコックらは村山三坊のひとつ大鏡坊に宿泊した。オールコックは、大鏡坊で用意された風呂の仕組みや即席のソファに感心したという。『大君の都』には「寺院内の聖所を二つに仕切り、公使専用の部屋を用意してあった」とあり、奥の間がオールコックの部屋として使用されたと考えられる。

また、地域には、一行が缶詰を食べたり石鹸を使ったりしていたため、初めて見る缶詰や石鹸に大変驚いたという話が伝わっている。

③ 中宮八幡堂

「馬返し」とも呼ばれ、ここからは徒歩で登山することになっていた。

25日早朝村山を出発した一行は、ここで馬を返し、荷物を強力に預けた。また、中宮八幡堂では金剛杖が販売されており、一行も杖を購入して身支度を整えた。

④ 六合目山室

中宮八幡堂から徒歩での登山を開始した一行は、日暮れ頃、六合目(現新七合目)の山室に辿り着いた。持参した食料で簡単な夕食をとると、寒さとノミに耐えながら眠った。翌日は、熱いコーヒーとビスケットで朝食を済ませ、夜明けとともに出発した。

⑤ 山頂

空気の薄さや足場の悪さに苦しみながらようやく山頂に到着し、オールコック一行は素晴らしい眺めを堪能した。登頂した記念に、一行は山頂に英国旗を掲げ、火口に向けて祝砲を撃ち、山頂の万年雪で冷やしたシャンパンで乾杯をした。また、同行者のロ



「富士登山」

(オールコック著『大君の都』より
: 熱海市立図書館蔵)

ビンソンは測量を行い、フォンブランクは寺院(大日堂か)で神仏のスタンプを押してもらった。

⑥ 一ノ木戸

登頂に成功したオールコック一行は、3時間かけて一ノ木戸(現四合目付近)まで降りた。その夜は同所の山室に泊り、翌日無事村山へと下山した。

村山で休憩した後、一行は夕方大宮町に至り、用意されていた宿舎に入った。

(5) 熱海

7月26日、大宮町を出発したオールコック一行は、東海道を東へ戻り、29日熱海に到着した。以降、8月13日まで温泉や散歩などを楽しんで過ごした。

滞在中、オールコックは愛犬トビー(Toby)を亡くすという大事件に遭った。トビーは住民達に手厚く弔われ、その親切さはオールコックをいたく感激させた。江戸に戻った後、彼は「POOR TOBY」と刻んだ墓石を熱海に送り、愛犬の墓に建ててもらった。現在この墓石は、大湯間欠泉のそばに、オールコック滞在記念碑と並んで建っている。



オールコック滞在記念碑(左)とトビーの碑(右)

(6) 資料にみるオールコックの富士登山

前代未聞のことであったオールコック一行の富士登山は耳目を集め、一行が通過する東海道筋では見物制止命令が出されるほどだった。また、富士山の化身である天狗がオールコックの登山に怒ったため、登頂できなかったとする瓦版も発行された。

地域に伝わる資料にも当時の様子が記されている。大宮町の造酒屋の当主の日記『袖日記』には、一行の外見や荷物などを興味深く観察し、伝聞を交えつつ書きとめられている。また、オールコック一行のために、大宮町が宿泊場所の用意や人足・馬の手配など様々な準備や対応を行っていたことも記されている。しかし、これらの負担は

重いものであったため、オールコック以降の外国人登山の際にも度々問題となった。

富士山ろくの森林を管理していた富士山御林守上役石川孫四郎の日記には、オールコックの登山に備え、事前に富士山に登山したことが記されている。

オールコック以降も、富士山に登山するため外国人が大宮・村山を訪れた。大宮町の町役人角田桜岳の日記『桜岳日記』には、登山に来たスイス人(慶応2年スイス総領事ブレンワルト一行)や、アメリカ人(慶応2年アメリカ公使ポートマン)を見物するために周辺の人々が大勢集まっていたことが記されている。

「オールコックの富士登山」展

会期:平成22年6月25日~7月11日

場所:富士宮市富士山環境交流プラザ

主催:富士宮市教育委員会(富士宮市弓沢町150番地 電話:0544-22-1111(代))